

## 縄文時代の環壕（かんごう）

### - 恵庭市島松沢8 遺跡の発掘調査から -

恵庭市教育委員会郷土資料館主任学芸員  
鈴木将太 氏

今日のテーマ「縄文時代の環壕」は、縄文文化に興味のある方でも、あまり馴染みのない言葉だと思います。「環」は輪で、「壕」は堀を意味します。「さんずい」の「濠」の字を使用する「環濠」は、西日本を中心に、弥生時代に集落を防御する目的で集落の周りを囲ったものが知られていますが、今回お話しする縄文時代の「環壕」は「つちへん」の「壕」の字を使用します。

縄文時代の環壕は全国的に類例が少なく、苫小牧市静川遺跡、千歳市丸子山遺跡、恵庭市島松沢8遺跡の3例しか知られておりません。今回は恵庭市の発掘調査事例を中心にお話いたします。

島松沢8遺跡は恵庭市の最も北を流れる島松川に面した崖の上にあります。崖面は「島松軟石」と呼ばれる溶結凝灰岩が露出しており、かつて建築資材として使用するために石材の切り出しが行われていました。その影響などにより、近年では崖面の崩落がおきるようになり、崩落を防ぐ工事が必要となりました。そこで工事を行う前に、恵庭市教育委員会が発掘調査を行うことになりました。発掘調査に際しては、過去の記録などを調べますが、昭和7年にこの場所がチャシ跡ではないかということで撮影された写真が残されていることがわかりました。



▲ 昭和7年撮影の写真

発掘調査は平成26年度に行われ、その結果、時期が異なる二つの堀が重なって掘られていることがわかり、縄文時代の中期後半から後期初頭、約4,500年前から3,800年前の住居跡などの遺構が見つかったほか、縄文時代中期後半の天神山式を主体とした土器や、石鏃（せきぞく）、石斧（せきふ）や砥石（といし）といった石器が多数出土しました。

平成26年の発掘調査で得られた成果は大きく2つにわけることができます。

一つ目は環壕の意味と機能を考える上で重要であるという点です。縄文時代の環壕は、苫小牧市静川遺跡と千歳市丸子山遺跡の発掘調査の成果から、環壕の内側は生活の場ではなく神聖な場所、聖域のような場所であると考えられていました。これは、環壕で囲われた内側は住居跡などの遺構が極めて少数であり、生活の痕跡があまりみられないことによります。しかし、島松沢8遺跡の発掘調査では、環壕の内側や近くから炉跡を伴う住居跡が5軒見つっています。このことから生活の場でもあったと考えることができるようになりました。さらに、重量にして約2トン、6,500個ものこぶし大の石が、環壕の内外から出土しています。このような多量の石は前例のないものです。



▲ 島松沢8遺跡 環壕の断面

二つ目は、縄文時代の環壕が島松沢8遺跡から見つかったことが重要であるという点です。この遺跡はもともと「島松Bチャシ跡」と呼ばれ、崖面に露出した壕の断面などの現況や立地条件などから、その名前のとおり、アイヌ文化のチャシ跡であると考えられていました。しかし、平成26年度の発掘調査によって、チャシ跡の壕と考えられていたものは、縄文時代の壕であるということがわかりました。つまり、縄文時代の環壕とアイヌ文化のチャシ跡は外見上で判別がつかないということになります。このことから、全道に500箇所以上あると言われるチャシ跡のうち、発掘調査を実施していないチャシ跡の壕とされているものの中にも縄文時代の環壕がまじっている可能性があるということが明らかになりました。

また、島松沢8遺跡の発掘調査では、環壕の土層に薬品を塗って布を貼って土層をはがすという「剥ぎ取り」も行っており、全国に3例しかない環壕の土層の実物は、恵庭市郷土資料館で御覧いただくことができます。

## 「北海道でもっとも古い土器のはなし」

帯広百年記念館 館長  
山原 敏朗 氏

古い土器はなぜ注目されるのでしょうか。

土器は粘土を加熱して作られる硬い容器です。20世紀に入ってから近代科学技術の発達とともに、人類が化学変化を利用した最初の発明品と評価され、その古さが意識されるようになりました。煮炊きすることで食材のレパートリーが増え、人口増加につながったという意見や、土器に模様をつける行為が芸術的能力を大きく発展させたという意見もあります。いずれにせよ、土器の古さが人類の科学的、社会的、芸術的な先進性、いいかえれば歴史的な先進性を象徴するという思想が定着していく中で、その出現の時期やきっかけが重要視されることになったのです。



▲ 復元された土器

ヨーロッパや西アジアでは、土器は農耕や磨製石器などとともに出現した新石器時代の道具と理解されました。一方、日本では土器作りの方が農耕の開始よりもはるかに古いので、土器の登場をもって新しい石器時代、つまりは縄文時代とされました。縄文時代は6時期に区分されていますが、このうちの最も古い時期を草創期と言います。長い間、北海道では草創期の土器が作られていたかどうかよくわかりませんでした。2003年に行われた帯広市大正3遺跡の発掘によって、それが初めて確かめられました。北海道最古の土器の発見です。

草創期の土器は、他の縄文土器が見つかる土層より下の黄色い粘土層から出土しました。直下には砂礫（されぎ）面が広がっていたので、当時、遺跡は川の流れがすぐそばにある河原のような場所だったと思われます。定住するには不向きな場所なので、水にアクセスしやすい期間に限り滞在していたのでしょう。

大正3遺跡の草創期の土器は、底が丸く真ん中に「乳房状突起」と言われるポッチのようなものが付いています。土器の表面には爪で付けた文様があり、「爪形文土器」と言われています。土器の形や文様から、本州系統の文化を持った人達が残したのではないかと考えています。年代測定をしたところ、1万4千年くらい前のものだとわかりました。



▲ 土器製作と施文

発見から10年後、大正3遺跡の爪形文土器は、イギリスの科学雑誌『ネイチャー』に掲載された論文の中で、「海産物の煮炊きの証拠が確認された世界最古の土器」として紹介されました。

この論文は、イギリスの研究者たちが土器が発明された理由を探るため、日本の古い縄文土器に着目し、そのお焦（こ）げを使って幾つかの分析を試みたものでした。同位体分析の結果からは、大正3遺跡の爪形文土器は海洋性のものを煮炊きしていた可能性が高いと指摘され、また成分分析によって水生生物特有の脂が検出できたことが報告されました。内陸にある遺跡の土器なので、煮炊きされた海洋性の水生生物はサケ・マスなど溯上性の魚類ではないかと推測され、魚を煮炊きした証拠が残る一番古い土器、たとえば言うと、世界最古の石狩鍋ということになったのです。

大正3遺跡の土器が作られた頃というのは、氷河期が終わり、温暖化に向かい始めた時期にあたります。人々は、氷河が溶けて海水面が上がり、陸地が少しずつ狭くなってくるような環境の中でくらしていました。大正3遺跡の爪形文土器から得られた分析結果は、それまで陸の食べ物に頼っていたところに、水中のものも食べてみようかと当時の人びとが考えたことを反映しているのかもしれない。